



北の大地にアライグマを追って

——野生化アライグマの生態と防除——

(財)北海道森林整備公社

技術士（林業／環境部門） 青柳 正 英

はじめに

2000年（平成12年）度より北海道は、道央部を中心に野生化したアライグマによる農業被害や生態系への影響を憂慮し、本道生態系からアライグマの排除を基本とする「北海道アライグマ対策基本方針」（北海道2003）を定め、「野生化アライグマ捕獲事業」（以下、道アライグマ事業と言う。）を実施している。一方、国は、2005年6月1日、外来生物法（正式には、特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律）を施行し、生態系、人の生命・身体、農林水産業に悪影響を与えるもの、与える恐れのある侵略的な外来生物を「特定外来生物」とし、アライグマを指定し、その飼育・栽培・保管・運搬・販売・譲渡・輸入などを規制し、野外に生息するこれらの防除を進めることとしている。

本稿では、2000年度より道央地域で実施してきた道アライグマ事業を中心に、野生化アライグマの捕獲状況、その生態と防除方法等について報告する。

I アライグマ問題について

1 アライグマとはどんな動物か

アライグマ（*Procyon lotor*）の原産地はアメリカで、北米のカナダ南部から中米（近縁種は南米）まで広く分布する。このうち、高山と砂漠を除き、低地から山地の森林地帯に生息し、水辺を好む。木登り、水泳ぎが巧みで、主として夜行性で、冬期には冬ごもりをする。食性は雑食性で小哺乳類、鳥類及びその卵、魚類、両生類、爬虫類、昆虫類、穀物などで時には死肉も食べる。特に、トウモロコシや魚が好物で両手（前肢）につかんで食べる。年1産、1産3～6子、交尾期は1月でこの時期1雄多雌の

雌雄関係を結ぶ。妊娠期間は約2ヶ月で3～4月に木の洞などで出産。性的には1年で成熟し、寿命は14年の記録がある。知能が高く好奇心が強く、天敵はフィッシャーテン（原色科学大事典 5 動物II、1968）。学名のプロキオンは「原始的なイヌ」、ラトルは「洗う者」を意味する。

2 アライグマ問題とは何か

図-1は、北海道におけるアライグマの農業被害額と捕獲数の推移を示したものである。

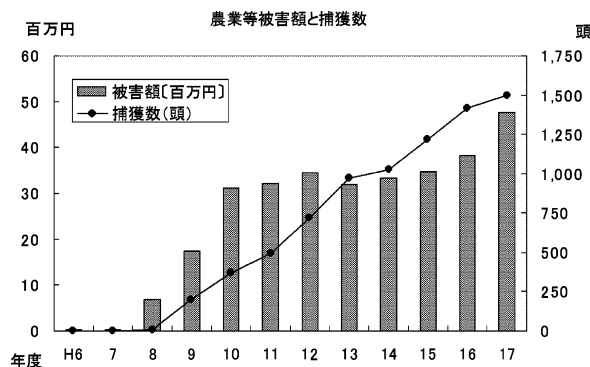
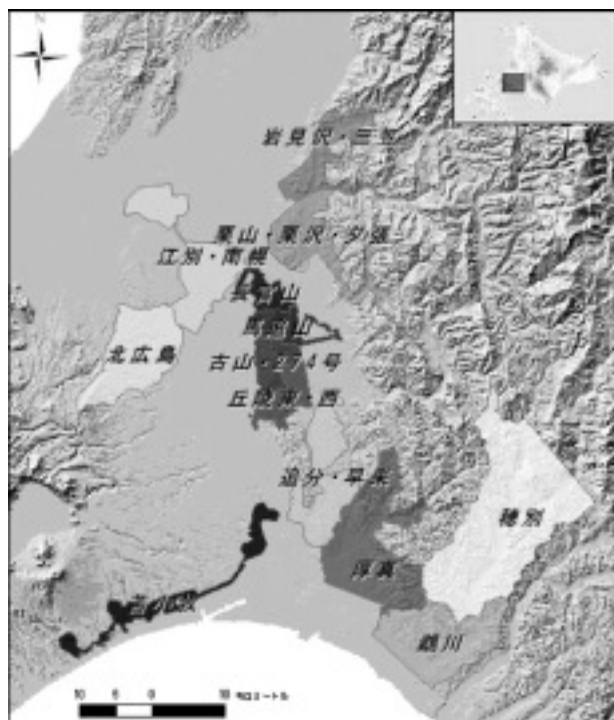


図-1 アライグマの農業被害額と捕獲数の推移

アライグマの捕獲数は年々増大し、2005（平成17）年には約1,500頭となっている。一方、農業被害額は、平成10年頃まで急増し、その後は3,000万円台で推移していたが、近年、また増加傾向に転じ、平成17年には、約4,800万円となってる。その主なものはメロン（33%）、スイートコーン（27%）、イチゴ、デントコーン、果樹、スイカで74%を占めている（北海道、2006）。アライグマの我が国への侵入は、ペットとしての輸入で、テレビアニメ「あらいぐまラスカル」で人気が高まり、本道でも1980年代半に販売のピークを迎えた。本道における最初の野生化



図一 2 調査対象地（H 18 年度）

は、1979 年に恵庭市に於いて飼育中の 10 頭程度が逃亡し、これらが周辺酪農地帯に定着したものである（池田、1999）。

外来生物アライグマが抱える問題は次の３点である。

- ① その土地の生態系への影響（捕食、競合、病気の蔓延など）
- ② 農業など産業への影響
- ③ 人の生命や健康への影響（狂犬病やアライグマ回中など感染症伝播のおそれ）

これらはヨーロッパやロシアでも同様である。特に日本においては、全国に生息分布が拡がり、本道におけるアライグマ生息の確認市町村（2006年10月現在）は119市町村で66%となっている。

II 調査の目的・方法

1 目的

本道の野外から「アライグマ排除の可能性とその課題」とアライグマの「効率的な捕獲方法」を明らかにするため、次の3点を検討する。

- 1) 道央地域におけるアライグマの捕獲数から生息数を推定する。
- 2) アライグマの生息環境を明らかにする。

3) 効果的な防除方法を確立する。

2 調査対象地

調査地は、平成 12 年よりほぼ同一地点で捕獲調査（以下、捕獲という。）を継続してきた札幌の東方に所在する野幌丘陵および馬追丘陵地域の約 10,400 ha（以下、継続調査地という。）と、この周辺部で断続的に捕獲を実施している約 1～2 万 ha の地域（以下、周辺調査地という。）である（図－2）。なお、この内、野幌森林公園地区及びその周辺部は、平成 17 年度より環境省の調査研究対象地となり、道はこの地区の捕獲を中止している。

3 捕獲の方法

捕獲には箱ワナ（幅 27 cm、高さ 32 cm、長さ 82 cm）を用いた。箱ワナ（以下、ワナという。）は 1 地区（約 2,000 ha）に 50～60 個とし、400～500 m 間隔にほぼ方形に連続 21 夜設置した。餌は、ドッグフード、コーン菓子、揚げた食パンを用いた。図-3 は、その捕獲状況である。



図-3 ワナと捕獲されたアライグマ (♂ 5.8 kg)

4 生息数の推定

生息数の推定は、除去法(森林野生動物研究会編：森林野生動物の調査 1997) による。除去法では、累積捕獲数を横軸に、捕獲数を縦軸にとり、その回帰直線が横軸と交わる地点を生息数とする。なお、平成 18 年度の調査地区の面積、捕獲期間、ワナ設置数など調査状況は、表-1 のとおりである。

5 生息環境の分析方法

アライグマの捕獲数と生息環境との分析は、数量化Ⅱ類（森林野生動物研究会編：森林野生動物の調

表－１ ワナ設置状況（平成 18 年度）

地域名	地区名	面積 (ha)	ワナ 設置数	設置時期	ワナ・日数
馬追丘陵	長官山	1,725	50	5/14～6/3	1,050
	馬追山	1,842	50	5/14～6/3	1,050
	古山・274 号	2,206	50	5/14～6/3	1,050
	丘陵東・西	2,623	50	5/14～6/3	1,050
	小 計	8,396	200		4,200
野幌丘陵	野幌南	1,027	50	7/5～7/25	1,050
	野幌北	965	50	7/5～7/25	1,050
	江別・南幌	2,785	50	7/5～7/25	1,050
	北広島	1,954	50	7/5～7/25	1,050
	小 計	6,731	200		4,200
岩見沢・栗沢丘陵	岩見沢・三笠	2,496	60	6/7～6/27	1,260
	栗山・栗沢・夕張	3,376	63	6/7～6/27	1,323
	小 計	5,872	123		2,583
勇払丘陵	追分・早来	2,272	60	7/1～7/21	1,260
	厚 真	1,299	50	6/1～6/22	1,050
	穂 別	2,227	50	7/18～8/7	1,050
	鷗 川	1,072	50	6/25～7/15	1,050
	苫小牧	1,952	50	5/16～5/30	1,050
	小 計	8,822	260		5,460
合 計		29,821	783		16,443

査 1997) により行った。この手法は、土地利用、林相などワナ設置点に於ける環境要因に関する情報を基にして、アライグマの生息状況（生息の有無、生息数の多寡）を予測する方法である。

外的基準としては、1 ワナ当たりの捕獲数とし、今回はその平均値 (3.0 頭) を基に、表－2 にみるようにカテゴリーは 3 区分とした。

表－2 外的基準のカテゴリー区分

カテゴリー	1	2	3
内容 (捕獲数)	0 頭	2 頭以下	3 頭以上

説明要因としては、土地利用、林相、植生、植生密度、水環境、人家からの距離、畜舎からの距離の 7 項目とした。各項目のカテゴリーは、表－3 のとおりである。

III 調査結果

1 捕獲数について

1) 捕獲数の推移

継続調査地である 6 地区 (約 1 万 ha) のアライグ

表－3 捕獲地状況表 (カテゴリー区分)

項 目	カテゴリー		項 目	カテゴリー	
	番号	内 容		番号	内 容
土地利用	1	森林	植生密度	1	密 (4、5)
	2	(100		2	中 (2、3)
	3	ha 上)		3	疎 (0、1)
	4	水田	水 環 境	1	池 (1 ha 以上)
	5	林内 (100 ha 下)		2	池 (1 ha 未満)
	6	林縁		3	河川 (幅 10 m 以上)
	7	水田		4	沢
	8	林内 (100 ha 下)		5	用水路
	9	林縁		6	湿地
	10	畑		7	乾燥地
	11	庭	人 家 からの 距 離	1	50 m
林 相	1	針葉樹林		2	100 m
	2	広葉樹林		3	200 m
	3	混交林		4	500 m
植 生	4	森林以外		5	500 m 以上
	1	湿性草本 (ヨシ)	畜 舎 からの 距 離	1	50 m
	2	大型草本 (ヨモギ)		2	100 m
	3	ササ		3	200 m
	4	適潤性草本		4	500 m
	5	乾性草本 (ススキ)		5	500 m 以上
	6	木本 (ハイイヌガヤ)	(外的基準)	1 ワナ当たりの捕獲数	

マ捕獲数の推移は表－4 のとおりである。

生まれた当年の幼獣は、道央地域では通常 6 月末以前には野外での単独行動 (自立) は見られない。そこで、捕獲時期による捕獲数の変動を避けるため、捕獲成獣のみを分析対象とした。また、年度により区域面積や捕獲時期・期間、ワナ設置数等を若干変動せざるを得ない状況が生ずるので、これらの影響を避けるため必要に応じて生息密度 (100 ha 当りの生息数) および CPUE (Catch Per Unit Effort : 100 ワナ・日当たりの捕獲数) により分析を進める。

2) 捕獲個体の性比

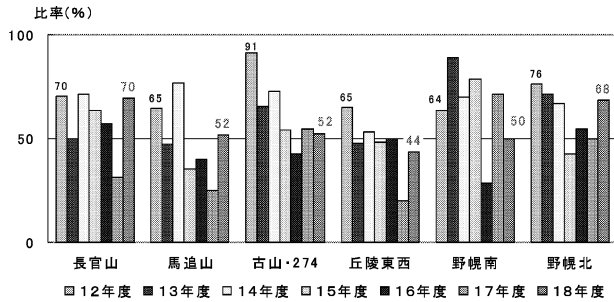
捕獲成獣に占めるメスの比率 (%) は、図－4 にみるように、一般にメスの比率が高く、捕獲を継続するにつれてこの比率は低下する傾向にある。しかし、平成 18 年度はいずれの地区でも前年度よりも高いか、または、50% 以上の高い比率となっている。

3) 平均体重の推移

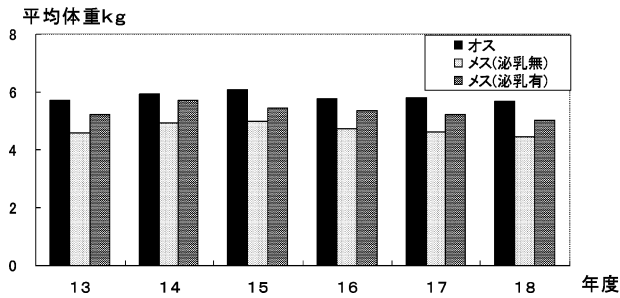
平成 13～18 年度の 5～6 月期に捕獲した成獣の

表－4 アライグマの捕獲数の推移

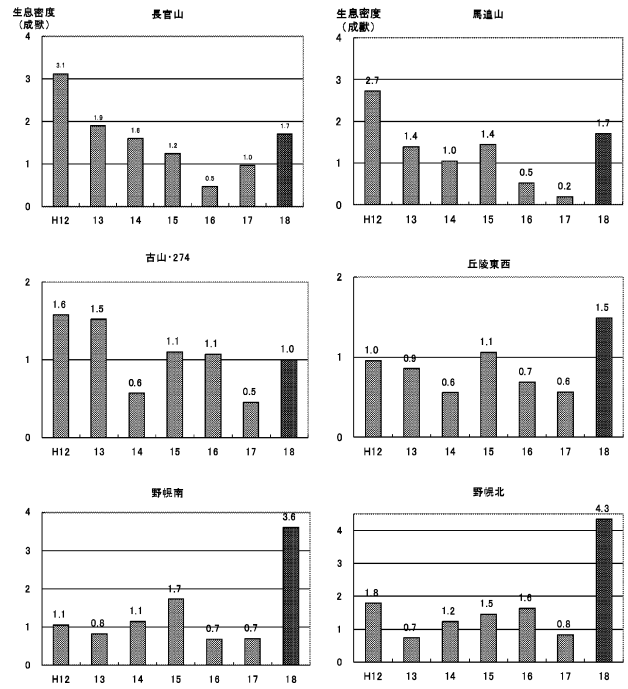
地区名	12 年度		13 年度		14 年度		15 年度		16 年度		17 年度		18 年度	
	全数	成獣	全数	成獣	全数	成獣	全数	成獣	全数	成獣	全数	成獣	全数	成獣
長官山	36	27	16	16	18	14	13	11	10	7	16	16	23	23
馬追山	46	34	17	17	20	13	17	17	10	10	4	4	25	25
古山・274	72	34	57	26	23	11	38	24	21	21	11	11	23	23
丘陵東西	34	23	25	21	32	15	29	25	14	14	15	15	32	32
野幌南	12	11	14	9	23	10	26	14	7	7	7	7	16	16
野幌北	28	17	12	7	19	9	19	14	11	11	8	8	19	19
計	228	146	141	96	135	72	142	105	73	70	61	61	138	138



図－4 捕獲成獣の性比の推移



図－5 性別平均体重の推移（5～6月捕獲）



図－6 アライグマ（成獣）の生息密度の推移

性別、泌乳（授乳の有無）別平均体重を図－5に示す。

この図からは、時系列的に体重のわずかな減少傾向はみられるが、とりわけ平成18年度が異常であるという兆候はみられない。

検証のため捕獲個体の体重の標準偏差を平均値で割った変動係数についてみると、いずれの年度のオス、メス（泌乳有り：育児のため授乳中）、メス（泌乳なし）も15%程度で、年度間および性別による違いは見られない。

2 生息密度の推移

地区別生息密度（100 ha 当たりの生息数）の推移は、図－6のとおりである。

平成17年までは捕獲効果により生息密度は、順調に低下していると予測されたが、平成18年にはいずれの地区でも急激な生息密度の増大が見られた。

生息密度の急激な増大は極めて深刻である。

3 生息環境の解析

1) 捕獲数と生息環境

平成12～18年度において、同一箇所に継続してワナを設置した212地点の説明要因および外的基準の

カテゴリー別標本数、CPUE等は表－5のとおりである。

総捕獲数は638頭であり、1ワナ当たり平均捕獲数は、3.0頭である。なお、この分析における、外的基準、説明要因は前掲の表－2、3のとおりである。

この結果、予測判別の中率（あるワナ地点の推定捕獲数と現実の捕獲数の的中度合）は64.2%となり、比較的高い値であった。

表－5のカテゴリースコアをグラフに表示すると図－7のとおりである。

2) 生息環境の分析

図－7によると、捕獲数の0頭、2頭以下、3頭以上のそれぞれの平均値（黒丸）が、1（X）軸に沿ってマイナスからプラスの方向に0頭、2頭以下、3頭以上と順序よく並んでいる。それゆえ、X軸が生息数の多寡（プラス方向が生息数が多い）を示していることになる。このことより表－5、図－7から以下のことが読み取れる。

(1) 捕獲数に影響を与える項目（アイテム）

捕獲数（生息数）の多寡に与える影響の大きい項目は、畜舎からの距離（レンジ2.8）、土地利用（同2.5）、植生（1.7）の順である。一方、水環境（偏相関係数0.3）も大きく影響を与えている。環境要因の

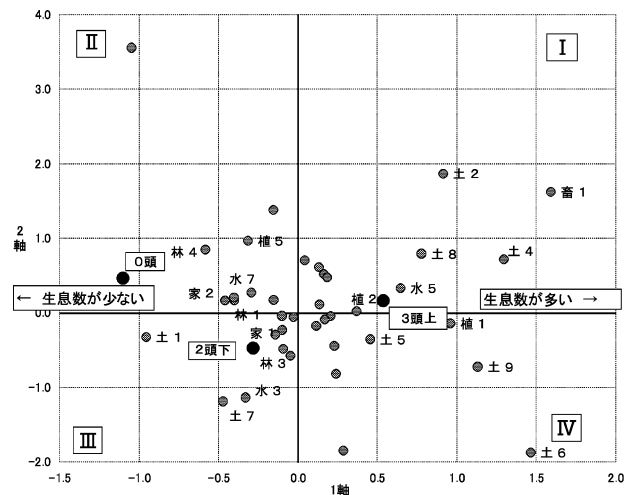
表－５ 各項目のカテゴリー別標本数、CPUE 等

項 目	環境要因		標本数	外的基準			捕獲効率		カテゴリースコア	
				0 頭	2 頭以下	3 頭以上	捕獲数	CPUE	1 軸	2 軸
土地利用	大森林 (100 ha 上)	林内	83	29	34	20	136	1.1	-0.95	-0.33
		林縁(水田)	5	0	0	5	38	5.2	0.92	1.86
		林縁(畑)	32	3	12	17	102	2.2	0.12	-0.18
	小森林 (水田)	林内	1	0	0	1	5	3.4	1.30	0.71
		林縁	2	0	1	1	7	2.4	0.46	-0.36
		水田	3	0	1	2	9	2.0	1.47	-1.88
	小森林 (畑)	林内	7	0	4	3	15	1.5	-0.47	-1.19
		林縁	63	3	13	47	253	2.7	0.78	0.79
		畑	16	1	3	12	73	3.1	1.13	-0.73
林 相	針葉樹林		22	9	8	5	35	1.1	-0.45	0.16
	広葉樹林		130	15	41	74	427	2.2	0.21	-0.05
	混交林		36	9	14	13	81	1.5	-0.09	-0.49
	森林以外		24	3	5	16	95	2.7	-0.58	0.84
植 生	湿性草本(ヨシ)		20	0	4	16	77	2.6	0.96	-0.15
	大型草本(ヨモギ)		22	2	6	14	92	2.8	0.37	0.02
	ササ		102	18	39	45	264	1.8	-0.10	-0.24
	適潤性草本		53	10	15	28	172	2.2	-0.29	0.26
	乾性草本(ススキ)		8	3	2	3	23	2.0	-0.31	0.96
	木本(ハイイヌガヤ)		7	3	2	2	10	1.0	0.05	0.70
植生密度	密(4、5)		28	2	12	14	89	2.2	0.24	-0.82
	中(2、3)		136	22	44	70	422	2.1	-0.10	-0.04
	疎(0、1)		48	12	12	24	127	1.8	0.14	0.61
水 環 境	池(1 ha 以上)		7	0	4	3	21	2.0	0.29	-1.86
	池(1 ha 未満)		15	2	4	9	44	2.0	-0.15	0.17
	河川(幅 10 m 以上)		4	0	2	2	16	2.7	-0.33	-1.14
	沢		112	10	35	67	401	2.4	0.17	-0.10
	用水路		9	0	1	8	47	3.6	0.65	0.32
	湿地		10	3	2	5	27	1.8	-0.15	1.37
	乾燥地		55	21	20	14	82	1.0	-0.40	0.17
人 家	50 m		23	3	6	14	70	2.1	-0.14	-0.30
	100 m		37	5	8	24	135	2.5	-0.40	0.20
	200 m		44	3	16	25	161	2.5	-0.04	-0.58
	500 m		32	2	12	18	109	2.3	0.23	-0.45
	500 m 以上		76	23	26	27	163	1.5	0.16	0.52
畜 舎	50 m		2	0	0	2	7	2.4	1.60	1.62
	100 m		1	1	0	0	0	0.0	-1.05	3.55
	200 m		8	0	2	6	27	2.3	0.19	0.47
	500 m		10	1	3	6	39	2.7	0.14	0.11
	500 m 以上		191	34	63	94	565	2.0	-0.03	-0.06
捕 獲 数 (外的基準)	0 頭		36	36			0	0.00	-1.10	0.46
	2 頭以下		68		68		97	0.97	-0.28	-0.48
	3 頭以上		108			108	541	3.41	0.54	0.15
総 数			212	36	68	108	638	2.0	0.00	0.00

項目ではこの4つの影響が特に大きい。

(2) 捕獲数と生息環境

1ワナ当たりの捕獲数が3頭以上のカテゴリーは、図－7の第I、IV象限に分布し、畜舎より50 m以内、水田や畑内、水田沿いの林内、畑の林縁、用水路などの影響が大きい。捕獲数1～2頭のカテゴリーは、第III象限に分布し、畑沿いの林内、河川、大森林内などの影響が大きい。一方、捕獲なし(0頭)は、第II象限に分布し、畜舎から100 m以内、森林以外、乾燥地、乾性草本などの影響が大である。これらを纏めると表－6のとおりである。



図－7 カテゴリースコア点グラフ

4 性別による生息環境

平成14～18年度の5年間、継続して捕獲を行った315地点に於ける成獣オス319頭、メス366頭、計685頭の性別による生息環境の分析は以下のとおりである。なお、この場合の数量化II類の外的基準は、

表－6 生息状況と環境要因

区分	生息数の多いカテゴリー	生息のみられるカテゴリー	生息のみられないカテゴリー
12～18年	畜舎から50 m以内 水田・畑内 林内(水田) 林縁(水田、畑) 用水路	林内(畑) 河川沿い 大森林内	人家・畜舎から50～100 m 乾燥地 森林以外 乾性草本(ススキ) 針葉樹林

1ワナ当たりの捕獲数が2.2頭となるので、カテゴリは、1；捕獲0頭、2；1頭、3；2頭以上とした。その結果は以下のとおりである。

1) カテゴリースコアと生息環境

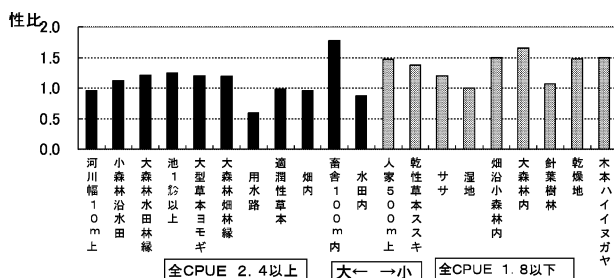
前項と同様に成獣の性別による生息状況と環境要因についてみると表－7のとおりである。

表－7 性別による生息環境

性別	生息数の多いカテゴリー	生息の見られないカテゴリー
オス (成獣)	小森林沿いの水田内 大きな池の周辺 大・小森林の水田林縁 用水路周辺	大森林内 乾燥地 畜舎から200m以内 湿地
メス (成獣)	河川(幅10m以上) 小森林の水田林縁 大森林の水田、畑の林縁 人家から500m以上の地点 大きな池周辺	針葉樹林 乾燥地 小森林の畑林縁 森林以外 人家から100m以内

2) CPUE と生息環境

各カテゴリの雌雄合計のCPUE(以下、全CPUEという。)が平均(2.1)より2割以上多い地点、及び少ない地点でのオスに対するメスのCPUE比(メス/オス)を比べると図－8のとおりである。



図－8 CPUEのメス/オス比(成獣)

これによると、全体ではメスのCPUEがオスに比べ16%高く、生息数の多い地点(左側)では、水環境の用水路でメスが極端に少なく、畜舎から100m以内の地点でメスが極端に多くなっている。一方、生息数が少ない地点(右側)では、湿地、針葉樹林、ササ地を除いてメスの方が3～6割と大幅に多く生息している。

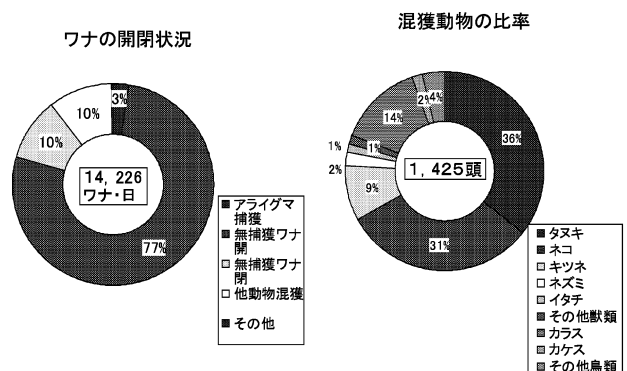
5 ワナの稼働状況と混獲について

ワナを設置すると、必ず目的外の生物が誤って捕獲される。これは混獲(錯誤捕獲)といわれ、野生生物管理、または捕獲効率を上げる上での大きな問題となる。混獲された動物は、毎日のワナ巡回時に

速やかに放逐されるのだが、同一個体(特にタヌキ、ノネコ)が餌付けされたように何度も混獲される。

図－9は、平成14～18年度の5か年平均のワナ稼働状況と混獲動物の比率(%)を示したものである。

これによると、約14,000ワナ・日のうち8割弱がワナをかけたままの状態にあり、10%がワナは閉じているが獲物なしの状態、さらに10%に他の動物が混獲されている。その結果、総ワナ・日に占めるアライグマの捕獲はわずか2.5%であり、8～9割のワナが有効に稼働していない状況にある。



図－9 ワナの開閉と混獲状況(H14～18年度平均)

IV 考察

1 生息密度について

平成17年度段階の生息密度の推移では、平成12年度を初年度(経過年数をX)とし、その生息密度をYとして回帰式を求めると、回帰直線のXの係数(勾配)はいずれもマイナスとなり、生息密度の減少傾向は明らかであり(表－8)、このまま推移すれば野外排除(生息数0頭)も可能であると予測された。しかし、予測に反し、生息密度は平成18年には一挙に増大し、捕獲当初またはそれ以上に回復している。

表－8 回帰直線の状況(成獣の生息密度)

地区名	勾配	切片	決定係数	相関係数	生息数0の年
長官山	-0.442	3.09	0.809	0.90	7.0
馬追山	-0.425	2.71	0.806	0.90	6.4
古山・274	-0.184	1.69	0.547	0.74	9.2
丘陵東西	-0.094	1.18	0.344	0.59	12.6
野幌南	-0.046	1.20	0.049	0.22	26.3
野幌北	-0.130	1.57	0.244	0.49	12.1

さらに、道アライグマ事業の速報によると、平成19年度も若干減少する程度で、依然として高い生息密度が保たれている。そこで、次にアライグマの性比と体重から生息密度の増大要因について考察する。

2 捕獲個体の性比

捕獲成獣に占めるメスの割合は当初は高く、捕獲を継続するにつれて低下する傾向がある。図-4をみると、生息密度と同様にメスの性比には、平成17年度までは減少傾向が伺えた。しかし、丘陵東西、野幌南地区では一度減少（20%、29%）したのに翌年には2倍以上となるなど異常な変動がみられ、平成18年には殆どの地区でメスの性比は5割以上となっている。このような性比の急激な増大は、捕獲対象地外からの成獣メスの侵入に起因するものと考ええる。

3 捕獲個体の体重の推移

図-5では捕獲個体の平均体重は、わずかに減少傾向を示すが、年度により性別、泌乳別体重には特異な現象は見られない。このことから、近似齢の個体（主に成獣メス）が外部から侵入して、当該地区の生息密度とメスの比率を高めたと推定することは十分可能である。現実には侵入路と想定される小河川や用水路内に多くのアライグマの足跡を確認している。

正確には年齢測定やマイクロチップ、インプラント式発信器の導入、DNA鑑定など、より高度な手法による解明が待たれるところである。

4 アライグマの好む生息環境

1) 環境要因の項目（アイテム）の影響度

調査結果によると、生息数の多寡に影響の大きい項目は、成獣全体では畜舎からの距離、土地利用、水環境である。これを性別にみると、オスでは土地利用、水環境、畜舎からの距離、植生の順であるのに対し、メスでは水環境、土地利用、植生、人家からの距離の順となっている。

2) 各項目のカテゴリーの影響度

生息数の多いカテゴリーは、水田や畑及びその林縁であるが、性別ではオスは用水路、メスは大きな川や大きな池の周辺となっている。

生息がみられないカテゴリーは、オスでは畜舎周辺、メスは人家周辺で、共通しているのは水の得られない乾燥地である。

3) CPUE と生息環境

全CPUEの高い地点では、メスはオスに比べて用水路周辺で生息が少なく、畜舎周辺で多い。また、逆に低い地点では、全般にメスの生息が多く、湿地、針葉樹林（人工林）を除いて大森林内、人里離れた地点、畑沿いの小森林内、ササ地、乾燥地、乾性草本地などでは、メスの生息が多くなっている。

このことから、メスは、人里離れた森林内に多く生息し、子育てや生存のため餌を求めて畜舎周辺、大きな河川、森林沿いの田畑を徘徊している。一方、オスの行動圏は主に人里近い田畑や用水路、大きな池周辺などである。

4) 道央地域の生息環境

アライグマの生息適地は、畜舎に近く、森林に隣接する畑や水田内及びその林縁で、近くに大きな川や池がある環境である。このような立地は道央地域の農村部では極めて一般的であり、アライグマの最も好む生息環境といえる。その証拠に、原産地アメリカよりも北海道の方が成長が早く、しかも1度に多く（1～7子、平均4.1子）出産するという（浅野玄他、2001）。

5 アライグマの排除を目指して

捕獲の継続により次の点が明らかになった。

1) アライグマ排除上の課題

- ① 箱ワナの稼働状況は、約14,000ワナ・日に対し、僅か2.5%にアライグマが捕獲され、8割以上が効果的に機能していない状況にあり、適地を正確に把握し、上手にワナを設置することが極めて重要である。
- ② 混獲動物はアライグマ捕獲数の約5倍にも及び、かつ、アライグマの生息密度の低下につれて混獲の可能性は高まり、その対策は大きな課題である。
- ③ ある地域の生息密度が低下すると、周辺の高密度地域から侵入が始まる。それ故、アライグマの排除には、周辺からの侵入防止対策が必要不可欠である。
- ④ 箱ワナによる捕獲では、100ha当たり0.2頭位までが限度であり、これ以上の低下は極めて困難

である。

2) 今後の課題

- (1) 混獲防止について、
 - ① ワナの設置方法（特に餌、場所、時期の3つの組み合わせ）と
 - ② 箱ワナ以外の捕獲器具の併用の検討
- (2) 周辺部からの侵入対策としては、
 - ① 侵入路の特定、柵などの遮断方法の開発、
 - ② 広域かつ同時防除方法などの検討
- (3) 効率的な防除方法の開発について、
 - ① 専用犬の育成や追い込み猟の普及など技術面に加えて、
 - ② 社会的な面での捕獲についての普及啓発、地域社会との連携、これらを組み合わせた「総合防除体制の確立」等があげられる。

まとめ

平成12年から7年間、道央地域の野幌丘陵、馬追丘陵を中心にアライグマの捕獲を継続してきた。

その結果以下の事項が判明した。

- ① 捕獲成獣のメスの比率は、当初は6～9割と高いが、捕獲を継続するにつれて年々低下し、それにつれて周辺部から新たな侵入が発生する。
- ② アライグマの排除には、高い捕獲圧の維持と同時に周辺部からの侵入防止措置が不可欠である。
- ③ アライグマの生息に影響の大きい項目は、畜舎からの距離、土地利用、水環境であり、生息数の多いカテゴリーは、畜舎周辺、畑や水田及びその林縁や用水路、河川沿いなどである。
- ④ 生息の少ないカテゴリーは、人家周辺、湿地や乾燥地、乾性草本植生、森林以外などである。
- ⑤ 性別には、メスは主に人里離れた森林内に生息し、子育てや生存をかけて畜舎周辺、大きな河川、森林沿いの田畑を徘徊し、オスの行動圏は主に人里近い田畑や用水路、大きな池周辺である。
- ⑥ アライグマは、いずれのカテゴリーでも捕獲さ

れるなど、極めて旺盛な行動力を持つ害獣である。

- ⑥ 混獲対策は野外排除上極めて重要である。
- ⑦ 箱ワナだけの捕獲では、100 ha 当たり0.2頭が限度であり、アライグマを本道の自然から排除するには、既往の捕獲具の改良、新たな捕獲具、捕獲方法の開発を含め、道民総ぐるみの総合防除体制の確立が緊急にして不可欠である。

謝辞

アライグマ捕獲事業に関しご指導、ご協力を頂きました北海道環境室、酪農学園大学浅川満彦教授、獣医師の場洋平氏、浅川良美氏、北海道大学池田透教授、阿部豪氏に厚くお礼申し上げます。

（北海道森林整備公社）

引用文献

- 浅野玄他（2001）北海道における移入アライグマの繁殖学的特性 日本野生動物学会発表抄録
 池田透（1999）北海道における移入アライグマ問題の経過と課題 北海道大学文学部紀要
 原色科学大事典5 動物II（1968）学研

参考文献

- 北海道（2003）北海道アライグマ対策基本方針 2003.5 北海道 環境生活部
 前崎、青柳、林（2003）馬追・野幌丘陵における野生アライグマの生息数（密度）の推定とその生息環境 森林野生動物研究会誌 No.29
 野生アライグマ捕獲業務報告書（2001～2006）北海道森林整備公社
 野生動物研究会編（1977）野生動物の調査 共立出版
 北海道（2006）平成18年度のアライグマ対策行動計画 北海道環境生活部 環境室自然環境課
 青柳正英（2006）野生アライグマの生息と捕獲 北方林業会